

【特集】海士の唄 2

“いま、ふるさとの幸をよぶ” 海士町民の歌 ～再び注目の作詞家、宮田 隆さん～

海士町民の歌

作詞 富隆
作曲 山本 稔

(一) 潮路はるかな 日本海
群島隠岐の 中島
よせくる波も かがやきみちて
生産の歌は たらこ
みよ海士町は ここにあり

(二) 森の木立は 承久の
昔を語る 後鳥羽院
自然と文化 とけあうところ
観光の夢うつくしく
いまふるさとの 幸をよぶ

(三) 心ひとつに むすびあい
理想をめぐす 町づくり
港に里にめざす 栄えあれ
躍進の意気 栄えあれ
わが海士町よ

今年7月、オリンピック東京大会に向けて制作された「東京五輪音頭2020」が発表されました。この歌は、1964年に制作され歌手の故三波春夫さんらが歌ったことで知られる「東京五輪音頭」をリメイクしたのですが、東京五輪音頭の作詞者である宮田隆さんが海士町北分区出身の方だとしてご存知だったでしょうか。

宮田隆さんといえば、50年近く前に作られた「海士町民の歌」(当時は「海士村民の歌」)の作詞者です。歌詞に込められた当時の想いはそのまま、現代の私たちにも通じるもの。前進を続ける海士町にこの歌あり! と思える名曲なのです。

今も愛唱される「海士町民の歌」が作られたのは、1968(昭和43)年。海士町がまだ海士村だった時代に、明治百年を記念して制定されました。

同年9月に発行された「広報あま」には、左のように書かれています。

「宮田先生は、大正時代、当時海士小学校の校長であった宮田沢四郎先生の四男として、海士村北分出生されました。(中略)公務員(※島根県庁)として執務のかたわら、作詞をはじめ、放送劇やコント、随筆、シナリオ等も執筆され、(中略)作品の数は秋田・船川音頭から九州ざくらまで全国にまたがり、その数は60余詞に及んでおります。」

村民歌の作者コメントとしては、
「一番は村民の自覚、二番は郷土の文化観光の面をあらわし、三番は意気と発展をねがう心、という構成で作詞しました。」と記されています。

かたや東京五輪音頭は、島国である日本へ海を越えて多様な人々が集まってくる興奮や喜びが表現されており、日本ならではの季節感や祭り囃子の情感も漂う、明るく庶民的な歌。「海士町で生まれ育った宮田さん」だからこそ書けた歌詞かもしれません。世界的な視野でありながら郷里のイメージも浮かぶ、まさにグローバルな歌です。



また、今よみがえった東京五輪音頭は、石川さゆりさんや加山雄三さんという国民的歌手のほかに竹原ピストルさんが歌うことでも注目されていますが、その竹原さんは奇しくも、海士町と深いご縁があるアーティスト。2012年からこれまでに3回も海士町ライブを行っており、魂が伝わる歌や飾らない人柄で、海士町内には熱烈なファンが大勢います。

そんな竹原さんが、海士町出身の宮田さんが作詞した歌を、半世紀の時を超えて、世界に向けて歌う不思議。

竹原さんと親交があるなかむら旅館の中村徹也さんは、「あの人はきつとまた、海士の人に会いに来てくれる」と語っています。次の海士町ライブでは、「東京五輪音頭」が聴けるかもしれせんね!